No. 107
Launched 1969

宗教部報

りゅうこく

私たちは案山子!!
お米を守ってるよ!!
くわしくは
28ページを見てね!!

2022 こども教育学科おコメプロジェクト

宗教部報 りゅうこく No.107 目 次

巻頭言「讃仏偈と炭鉱住宅
—社会福祉を志した原点の一つ—」 …… 中根　真 …… 1

伝道部法話「人生の課題」 …… 藤　智草 …… 6

ご当地キャラクター・ゆるキャラで学ぶ日本の文学
「深草うずらの吉兆くん」 …… 部矢祥子 …… 12

龍大エッセイ『宗プラ・フォトエッセイ』 …… 内本義宜 …… 16

連載「《イケズ》と《気遣い》のはざまで
—京ことばの心髄にせまる—」 …… 泉　文明 …… 19

仏教パズル …… （出題）小川信正 …… 21

顕真館の声　法要・行事の報告 …… 23

表紙写真解説「こども米プロジェクト」 …… 野口聡子 …… 28

BOOK GUIDE …… 32

編集後記

間違い探し

巻頭言

讃仏偈と炭鉱住宅

―社会福祉を志した原点の一つ―

中根　真
（短期大学部長）

わたしは滋賀県の浄土真宗本願寺派寺院の次男坊として生まれた。そのため、幼い頃から阿弥陀さまや親鸞さまは身近な存在であった。お仏飯をいただきながら、大学では社会福祉学を専攻し、これまで社会福祉や保育の研究・教育を続けてきた。

そもそもなぜ社会福祉を志したのか。それを志す原点となったと思われる体験がいくつかあるが、ここでは「讃仏偈と炭鉱住宅」の思い出を書いてみよう。讃仏偈は「こうげんぎーぎー…」から始まる一〇分程度で読経できる「仏さまを讃えるうた」で、わたしが唯一暗唱できるお経だった。しかし、最近は唱える機会も減り、それすら怪しくなってしまっている。

何はともあれ、わたしの小学四年生当時、一九八〇（昭和五五）年八月のお盆にタイムスリップしてみよう。

ところは福岡県内の旧産炭地の、とある街。遠くにボタ山が見える。ボタ山とは炭鉱で石炭の採掘によって発生する捨石（ボタ）の集積場で、トロッコなどを用いて長年積み上げられてできた山である。ジリジリ照りつける灼熱の太陽の下、うだるような暑さのなか、着なれない白衣、布袍を身にまとい、数珠を握りしめ、履き慣れない雪駄でソロソロ、かつキョロキョロと歩く小坊主姿のわたしだ。

小学四年生以来、毎年八月一三、一四、一五日のお盆の三日間は、筑豊地方の大きな本派寺院の依頼を受け、お盆参りの加勢に汗を流していた。最初は中学一年生の兄と小学四年生のわたしが、そして後に五歳年下の弟も加わり、中根三兄弟は毎年夏休みの宿題や受験参考書を持参の上で参加する季節アルバイトだった。

当時の慣行では初盆の家は住職が参る、それ以外のご門徒の家は季節アルバイトで分担して全戸を訪問していた。車やバイクに乗れるアルバイトは遠方のエリアを、わたしたち子どもは徒歩または自転車で行けるエリアを担当した。名簿とゼンリン地図を頼りに、ご門徒の家を一軒一軒訪ね歩き、讃仏偈を唱える。三日間でおよそ一〇〇軒くらいだっただろうか。その後、わたしは大学二年生か三年生まで一〇年ほど毎夏おおむね同じエリアを訪問し、顔なじみになったご門徒も相応にいらっしゃった。

わたしにとってはお勤めの後のひと時こそ、少し緊張はするが、思い出深いものだった。読経の後、冷えた麦茶をいただきながら、

大人の方を前に世間話の一つもする。応対して下さる方もバラエティーに富んでおり、老夫婦や独居の高齢者だけでなく、帰省中の子や孫などがにぎやかに勢ぞろいしているお家もある。寝たきり高齢者のベッドサイドにお仏壇があることもしばしばで、一緒にゆっくり読経することもあった。無論、わたしが小坊主ゆえに、当初は「どこから来たの?」「何年生?」「一日、何軒のお家を訪ねるの?」など質問攻めにあうはめになったが、二年目以降は「また来てくれたんね」「何年生になったと?」など一年ぶりの再会の機会になっていた。

また、見るもの、聞くものすべてがもの珍しく、いろいろ不躾な質問をしたものだ。小学四年生当時はさすがに恥ずかしさでモジモジしていたが、年数を重ねるとともに、ご門徒と交わす話の内容は次第に変化していった。例えば、炭鉱住宅（数軒の長屋）では同じ鉱山事故によって命日が軒並み同じという現実があり、「お隣も、そのまた隣も…昭和〇年の事故やったばい」との言葉に絶句した。お仏壇の前で、故人の写真を見せていただきながら、そのファミリーヒストリーを断片的にお聞きする体験は、教室や教科書で見聞きする話とはまったく異なり、幼いわたしを圧倒した。生計中心者亡き後のくらしや子育ての苦労話に衝撃を受けた。さらに、家によっては地盤沈下の影響で柱や床が傾いた家屋もあり、旧産炭地の鉱害の一端として脳裏に刻まれた。

今から思えば、讃仏偈がご縁となった家庭訪問は、世の中には多種多様なくらしがあり、そこで日々くらす人びとがさまざまな価値観や心情、悩みを抱えて生きていることを、わたしに具体的に教えてくれた。読経をきっかけに遭遇した人びとのくらしの現実、切実

なくらしの声にふれる度に、なぜか心がモヤモヤ、ザワザワした。逆にいろいろな疑問が湧き出てきた。「お念仏やお経を唱えるけれど、人びとのくらしの悩みや困りごとが無くならんのは何でやねん」、「しんらんさまは寄り添って、いつも隣にいらっしゃると歌うけど、人びとがやはり苦しいのは何でなん?」、「なもあみだぶつって、いったい何やろうか?」など、小学生から中学生、高校生に成長しても疑問は増えていくばかりか、少しも心がすっきりしない。み教えやお念仏はありがたいものと両親から聞いて知っているが、この世で今ここを生きている人びとの苦悩や苦しみに対し、どのような意味をもつのか、そして、問題の解決や解消が少しもすっきり見えないことへの戸惑いがあった。住職であり、社会福祉協議会職員でもあった父親や、かつて保母であった母親にいろいろ疑問をぶつけたものの、ずっと未解決のままだった。そんな迷いのなか、本学社会学部社会福祉学科一期生として入学した。一九八九（平成元）年四月、これが本学とわたしとの直接的なご縁の始まりだ。

あれから、時が流れて三三年。現在、わたしはこども教育学科所属であることもあって、真宗保育や「まことの保育」に関する研究にも細々と取り組み、時に研修会講師を依頼されることもある。一般的にその意義や内容は宗祖・親鸞聖人の生き方や浄土真宗の教義から説明されるが、その際には先述した心のモヤモヤ、ザワザワがわたしを襲う。どうやら時と場所が変わっても基本的な問いは変わっていないようだ。宗祖・親鸞聖人の生き方や浄土真宗の教義ありきで考えるのではなく、まずは激動の今ここを生きる子どもや保護者のくらしを注意深く観察し、親子の切実な声、「声なき声」に

耳をすませることが問題解決を導く上で先決である旨をお話している。

近年、本学で声高に叫ばれる仏教 SDGs や ReTaction のさまざまな活動にふれるなか、遠い少年時代の思い出がふとよみがえった。炭鉱住宅で讃仏偈を読経する体験は一〇代のわたしを確かに大きく揺さぶった。その時は全然わからなかったが、今にして思えば、「仏教と社会」の関係や「仏教の社会性」を鋭く問いかける出来事だった。その時に感じたモヤモヤやザワザワした気持ちこそ、社会福祉を志した原点の一つだったこと、そして、今なおそれに突き動かされていることに改めて気がついた。

伝道部法話（ラブアンドピースウィーク　二〇二一）

「人生の課題」

藤　智　草
（真宗学一回生）

【ご讃題】

されば、人間の儚き事は、老少不定のさかいなれば、誰の人も早く後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏を深く頼み参らせて、念仏申すべきものなり。

（『御文章』／『註釈版聖典』一二〇三頁）

おはようございます。本日は、お足元の悪い中、ようこそのお参りでございます。

私は、伝道部一回生の藤智草と申します。限られた時間ではございますが、皆様とのこのご縁を喜ばせていただきつつ、仏様のみ教えを味わわせていただける時間になれば良いなと思っています。どうぞ、気を楽にしてお聴きください。

まず初めに自己紹介をさせていただきます。自己紹介と言いますと、自分の性格について話すことが定番ですね。でも、私は自分の性格について語るのが少し照れくさいので、心理テストを使ってみることにしました。夏休みの課題の取り組み方で性格を診断する、というテストです。是非、皆さんも自分がどれに当てはまるのか試してみてください。

このテストによると、「コツコツと課題を進めていく人」と答え

る人は安定を好むのだそうです。「最初にまとめて済ませてしまう人」は好奇心が強く、「最後の日にまとめてする」という人は賭け事が好きで、ギャンブル要素が強いのだそうです。

私は、いつも夏休みの最初に頑張って課題を進めるのですが、中だるみしてしまって、残りは最後の方にまとめてしてしまうことが多かったので、結局どれに当てはまるのかはわからないんですけれども、自分的には「好奇心が強い」というのがシックリくるように思います。

さて、課題と言いますと目標があります。作文なら何文字書けば完成、数学なら何問解いたら、というように目標があります。このような課題に限らず、私たちは色々な目標を持っています。お腹が空いたら「お腹を満たすため」にご飯を食べますし、「テストでいい点数を取るため」に勉強をします。私たちの行為には必ず「何かしらのために」という目標があります。

そうなりますと、私たちは生きていますので、この生きるということにも目標はあるはずです。しかし「何のために生きているのか」と聞かれますと、なかなかすぐには答えられないものです。

そもそも、この「生きる」ということは、他の行為の大前提としてあるものですし、生きることの終わりにあるものは当然「死」ですので、考える気にならないのは当たり前のようにも思えます。

しかし、この「生きている」という、普段当たり前だと思っている日常の中であっても、死について考えることがあります。それは、ペットや家族など大切な命が死を迎える時です。

大切な命を亡くしたことがある、という経験がある人がこの中にもいらっしゃるのではないでしょうか。私も、高校一年生の時に母を亡くした経験があります。

母が亡くなった時、「まさか」という気持ちでした。母は四十歳で亡くなりましたので、葬儀の際には「こんなに若くして亡くなるなんて」という言葉を何度も耳にしました。私も、母が亡くなるまでは「老いたものが先に死んでいくものだ」と思っていました。

ですが、母が亡くなって悲しんでいる祖父母の姿を見て「人間は、いつ死ぬかわからないものなのだな」と思うようになりました。

世間では、高齢の方が亡くなった時と、若い方が亡くなった時とでは、周りの人の反応に違いがあるように思います。

人間、いつか必ず死んでいきますが、私にとって、死は遥か先にあるものであり、歳を取ったものから順に訪れるものだと思い込んでいたのです。

最近では「人生百年時代」だとも言われていますね。でも、実際に私達はいつ死ぬかなんてわからないものなんです。

はじめに話した「夏休みの課題」のように期限が明確なものであれば、計画を立てることができます。目標が分かれば、目標に向かって歩むことができます。コツコツ進めなければ溜まった課題が私を苦しめることになります。

では、人生についてはどうでしょうか。人生の期限は何十年後にあるかもしれない。いや、数年後、もしかしたら明日かもしれない。

そんな中で私たちは生きています。それなのに、生きることについて考えることを先延ばしにしてしまうのです。

そして、そうしているうちに、余命宣告などで人生の期限がわかった時には、生きる目標を見つけて達成するまでの時間は短く、山積みになった人生の課題を前に絶望してしまうのです。

ここからは、仏教の話です。

仏教では、私たちは六つの世界を生まれ変わりながら回っていると考えられています。その中に、地獄や天上界という世界があります。このどの世界にも、必ず死という苦しみが存在します。この死の苦しみから解放されることを、仏教は人生の課題としているのです。

親鸞聖人の御師匠であられた法然聖人は、それを「生死出ずべき道」、つまり、苦しみから解放される道とされ、お念仏の道をお説きになりました。

この、お念仏の道に説かれるのは、「南無阿弥陀仏」と、阿弥陀様のお名前が私の口からこぼれた時に、浄土に往生させていただくことが定まる、ということです。

私たちは今日も「南無阿弥陀仏」とお念仏もうさせていただきました。このお念仏は、阿弥陀様の喚び声とも言われています。「必ず救う。我にまかせよ」という阿弥陀さまのお誓いがお念仏となって、私たちに喚びかけてくださっているのです。このお念仏が私の口から出た時には、すでに阿弥陀様の働きが私に届いているということです。その働きに任せて往生させていただく身に成っているのです。

話は戻りますが、最初に拝読しましたご讃題は、本願寺の第八代ご門主であられた蓮如上人が書かれた『御文章』の「白骨の章」というご文です。お葬儀やお通夜の際に拝読されますので、もしかしたら耳にされたことがある方もいらっしゃるかも知れません。

このご文の中に「老少不定」と「後生の一大事」という言葉が出てきます。

亡くなるということについて、老いも若きも関係ないということを「老少不定」、亡くなって浄土に往生させていただくことを「後生の一大事」と言います。

ですからこのご文は、人間がいつ亡くなるのかは老いも若きも関係ないのだから、往生させていただくことを思って念仏申すべきである、というお心が示されているのです。

この御文には確かに「念仏しなさい」と書かれておりますが、私は「一生懸命生きなさいよ」という意味で味わわせていただいております。

私たちの住むこの世界は苦しみで満たされています。ですが、念仏申し上げた時、阿弥陀さまが「まかせなさい」とそばにいてくださっていることを感じると苦しみと向かい合う勇気が湧いてきます。苦しみと向かい合えた時、苦しみの中にありがたさを見つけることもあります。

高校時代の三年間は、母をなくしたことで絶望し、全てが嫌になっていました。何か上手くいかないことがあると「自分は不幸である」と言い訳をし、逃げてばかりの自分を、さらに嫌になることもありました。

「人間はいつか死んでいくのに、一生懸命生きる意味って何なんだろう?」

「死んだらどうなるんだろう?」

と、悩んでいた時に、阿弥陀さまのみ教えに出あわせていただきました。

そして、もし母が亡くならなければ、このみ教えを喜ばせていただく私の身も、龍谷大学で学び、ここでご法話させていただくご縁もなかったのだろうなと思えた時に、私は初めて母の死を受け入れることができました。

人間は誰でも、儚く亡くなっていく運命にあります。しかし、亡き人はご縁という形で私の中に残っていくことを、母から、また阿弥陀様のみ教えから感じさせていただきました。

本日はお聴聞いただき、ありがとうございます。

肝要は拝読の御文章にていただきます。

【御文章拝読】

宗教部人権週間「Love&Peace Week」

二〇二一年十月八日　顕真館講堂にて

ご当地キャラクター・ゆるキャラで学ぶ日本の文学

深草うずらの吉兆くん

部矢祥子
（本学非常勤講師）

本学深草キャンパスと砂川小学校の周辺に、写真で示したのぼり旗が十本以上立っています。交通安全を呼びかける旗ですが、キャラクターがプリントされています。その名は「深草（ふかくさ）うずらの吉兆（きっちょう）くん」。伏見区のキャラクターで、着ぐるみのゆるキャラにもなっています。

本学東門前に立つのぼり旗

旗にプリントされた
キャラクター

さて、なぜ伏見区のキャラクターが吉兆くんなのでしょうか。吉兆くんに目を向け、名前や身体に関心を持って読み解けば、当地の深草や鶉（うずら）について知ることができ、さらには奈良時代の『万葉集』や平安時代の『伊勢物語』を学ぶきっかけになります。

『万葉集』に鶉を詠んだ歌が複数入集しています。このうち大伴家持と、読み人知らずの歌を挙げてみましょう。

鶉鳴く古（ふり）にし里ゆ思へども何ぞも妹に逢ふよしもなき

人言（ごと）を繁みと君を鶉鳴く人の古家に語らひて遣（や）りつ

『万葉集』から、鶉はさびれた里や人目が少ない茂みに棲み、鳴く鳥だとわかります。

平安時代になると、鶉は深草の地と結びつきます。『伊勢物語』の一二三段を要約すると、

男は、深草に住む女のもとに通っていましたが、次第に飽きてしまい別れようと和歌を詠みました。「長年、あなたのもとに通って来ましたが、私が訪れなくなれば、ここが一そう草深い野になってしまうでしょう」と。女は、「そうなれば、私は鶉に化身して鳴いています。あなたは狩にいらっしゃるでしょうから」と返しました。男は、女の歌に感嘆して別れることをとどまった、という話です。

命を落とすことは覚悟の上で、狩猟の獲物・鶉に化身する。狩するあなたの姿を見るだけで良い……。

この章段を踏まえて平安末期以降、藤原俊成と家定、西行、慈円らが、深草と鶉をセットにして歌を詠みました。中でも俊成の

夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里

の歌で、京都の深草と鶉が強く結びつくことになりました。俊成は、秋風が吹く夕暮れ時に深草の里で鳴く鶉を詠んでいます。

吉兆くんには、このような文学作品の背景があるのです。ではなぜ、名前が「吉兆くん」なのでしょうか。

それは、鶉の鳴き声が「ご吉兆（キッチョー）」と聴こえるからです（YouTubeに上がっている鳴き声を聴いてみてください）。このため、江戸時代になると鶉は縁起が良い鳥とされ、飼育して鳴き声を競い合う「鶉合わせ」が行われました。

吉兆くんの身体に注目すると、頭部にv字の模様があり、頬はピンク色です。これは、本物のウズラの特徴をうまく表現しています。ウズラの頭部にv字模様が見られ、オスは繁殖期になると顔が赤褐

色になるのです。

本学が建つ深草の地に、かつて棲息していた鶉ですが、今では、野生の鶉は北海道以外ではほとんどいないと言われています。吉兆くんと、伏見稲荷の参道で販売されているうずらの焼鳥が、往時を偲ばせています。スーパーマーケットのうずらの卵は、愛知県で飼養している鶉が産んだものです。

ウズラの頭部にV字模様あり

ゆるキャラ「おしなりくん」（東京都墨田区）も、『伊勢物語』を学ぶ契機になります。名前は、東京スカイツリーが建つ押上地区と業平地区、その押上の「おし」と業平の「なり」から付けられました。地名の業平は、平安貴族で歌人の在原業平が、この地で亡くなったとされる塚があることに由来します。これは、江戸時代に『伊勢物語』はノンフイクションであり、作中の男を実在の在原業平として読んでいたことを意味します。

『伊勢物語』の九段から十三段は、男の東下りの章段です。京の都に居づらくなった男が、居住地を求めて東国へさすらい、武蔵の国にやって来ます。男を業平とすれば、清和天皇の后予定者・藤原高子との恋が露見して都に居られなくなった業平の、東国流浪話となるのです。

おしなりくんは、『伊勢物語』で語られる京の都からやって来た男・在原業平がモチーフになっています。キャラクターは、狩衣（貴族の日常服）姿で烏帽子（ただしスカイツリー形）を被り、手に筆と短冊を持ち歌人・業平を表わしています。

二〇〇〇年、みうらじゅんが着ぐるみのキャラクターを総称して

「ゆるキャラ」と名付けました。以来、全国各地で千種を優に超えるキャラクターが作られて来ました。ゆるキャラの最盛期は、二〇〇六年のひこにゃん登場時です。この後十年間はゆるキャラ人気が継続しましたが、二〇一七年頃から陰りが見え始め、今ではゆるキャラブームは去りました。

けれども、数多く作られて来たゆるキャラたちを、日本の文学や歴史、各都道府県について学ぶ資料として用いることができます。

例えば、上代文学の『古事記』『日本書紀』の学びの契機に、あわ神（じん）・あわ姫（兵庫県淡路市のゆるキャラ。モチーフは国産みの神イザナギとイザナミ）、『万葉集』の学びに、人麻呂くん（島根県江津市。柿本人麻呂）や、家持くん（富山県高岡市。大伴家持）が利用できます。また中古文学では、こまちちゃん（秋田県湯沢市。小野小町）や、おおつ光ルくん（滋賀県大津市。源氏物語と光源氏）。中世文学では、ゆうさいくん（京都府舞鶴市。戦国武将で歌人の細川幽斎）や、ひやわん（三重県名張市。能大成者の観阿弥）。近世文学では、おがっきい（岐阜県大垣市。松尾芭蕉）や、ちかもんくん（福井県鯖江市。近松門左衛門）。現代文学では、たかっき・はたっき（山形県高畠町。浜田廣介の童話・泣いた赤鬼）や、ごん吉くん（愛知県半田市。新実南吉の童話・手袋を買いに）を利用することができます。

あまりにも身近で、幼稚に思えるゆるキャラですが、これに目を向けて名前や身体、持ち物を真摯に解読すれば、ご当地の理解が深まり、それが文学や歴史の学びにつながるのです。ゆるキャラを資料に利用すれば、学びが楽しくなります。詳細は、左記論文を参照してください。

部矢祥子「調査・研究対象としてのゆるキャラ・ご当地キャラクター」（龍谷大学国文学会『国文学論叢』第六三輯、二〇一八年）

宗プラ・フォトエッセイ

内本義宜
（短期大学部こども教育学科）

二〇二一年度仏教活動奨励金（愛称：宗教部プライズ・宗プラ）
フォトエッセイ部門　入選　三万円　テーマ「龍谷大学」

龍谷大学。今から四十数年前、私が文学部の受験に失敗した大学である。二月下旬の合格発表の日、一縷（いちる）の望みを胸に掲示板を見上げたが、私の番号はなかった。その瞬間、私の浪人生活が始まったのだ。

次は大学三回生のころだったと思う。たまたま本学の漕艇部に知り合いができ、合宿所に泊めてもらったことがある。その朝食の時である。何と部員全員が親鸞聖人への感謝の言葉を述べてから食事をするではないか。これには驚いた。

さらに月日が流れ、十年ほど前になるだろうか。長女が公募推薦で本学に合格した。年内に決まったので、家族一同大喜びだった。娘はおかげさまで有意義な四年間を過ごせたようだ。ただ、その間、私は一度も大学を訪れることはなかった。

数年前から「定年退職」を意識するようになった。そこで、「定年」に関する書物を何冊か読んでみた。しかし、どれも似たような内容で、健康に気を付け、配偶者に気を配り、地域でボランティアをするなど主体的な生活をするよう指南するものが多かった。また、年金を受給できるまでは働くこと、中には生涯現役で働くことを勧めるものもあった。いずれも自分が求めている答えではなかった。そうこうしているうちに定年退職を迎える年度となった。さて、どうすべきか。答えは見つからない。それなら、もう一度学びの場に戻って、考える時間をとってみようということで、本学の受験を決意した。入試日まで三週間余り。毎日、入試問題と格闘した。入試日は何と六〇歳の誕生日だった。結果は合格。うれしかった。前途が開ける思いだった。

今年の三月三十一日に定年退職の辞令をもらい、四月一日が入学式だった。まず、学長の挨拶が心に残った。江戸時代の盲目の学者、塙保己一の話であった。彼は「群書類従」を出版する際に、かつてひどい仕打ちを受けた版元を訪れ、「今日の私があるのは皆さんの冷たい仕打ちのおかげです」と述べたという。まさに自らの逆境

をバネに強靭な意志とひたむきな努力をした生涯だったという内容だった。彼の名は浪人時代に日本史の資料集で必死に名前を覚えた人物の一人であった。また、「宗教の思想」の授業では「釈尊」という言葉が出てきた。お釈迦様という言葉は知っていたが、それが「釈尊」「ブッタ」と同じ人物を指すとは知らなかった。夏休みには手塚治虫の「ブッタ」も通読した。これまで宗教とはあまり縁がなかったが、この大学に入り、仏の教えに接するのも何かの縁であろう。人生の後半戦を生きるヒントが得られそうである。

登校時にキャンパス内にある木立の姿が目に留まり、思わずシャッターを切った。その木は秋の日差しを浴びてきれいに輝いていた。ふと、この木のような晩年を過ごせたらと思った。四十数年ぶりに縁あって巡り合った龍谷大学、ここでの学びを豊かなものにしたいと思っている。

仏教活動奨励金（宗教部プライズ・宗プラ）

二〇二一年度・入選者の皆さん（五〇音順）

一ノ瀬葉七　一万円・岩井拓巳　二万円・内本義宜　三万円・小倉達矢　二万円・鳥喰唯誓　一万円・高島あすか　一万円・チャン　グエン　ティエン　キム　一万円・中村優吾　二万円・西村哲朗　二万千・東野空　二万円・堀切彩乃　二万円・山本哲平　一万円

仏教活動奨励金（宗教部プライズ・宗プラ）募集情報は宗教部ホームページで確認してください。

京ことばの心髄にせまる

《イケズ》と《気遣い》のはざまで

泉　文明
（国際学部教授）

第６回　ぶぶ漬伝説①—京ことば

京都に《ぶぶ漬（伝説）》なるものがある。全国的に有名である。日本人ならずとも、日本通の方なら、御存知の方も少なくない。別に京都米や江州米、宇治茶、京漬物のうま味を褒めたたえたものでもない。簡単に言えば、京都人の言語行動を遠回しにかつ緩やかに批判、あるいは揶揄したものである。

京都人を語るに際して、広く知られた逸話である。ぶぶはお茶のことである。大阪・京都を中心に関西では「茶」のことを「ぶぶ」「ぶぶぅ」、少し丁寧に「お茶」のことを「おぶ」「おぶぅ」などという。もともとはお湯の意味であり、白湯（さゆ）のことである。出典としては『浄瑠璃・油地獄 上』に「かか様ぶぶがのみたいも」というくだりが見られる。「（お）茶」について各地の方言では様々なものが見られるが。いずも地方に「ぼてぼて茶」なるものがあり［b］

音が入っているところは共通している。茶を独特の茶筅で泡立てる際に生じる音が「ぼてぼて」と聞こえることに由来しているという。「ぶぶ」の方は茶を淹れるか、すする際の音ではないかと推測できる。さて、肝心のストーリーに移ろう。

京都の人の家にお邪魔して一通り用件が済んだ頃、「ぶぶ漬けでもどうどす?」と言われたので待っていると、いつまで経ってもぶぶ漬けはいっこうに出てこない。これは「早く帰って下さい」と暗黙に伝えているのであり、いつまで経っても客を〝空気の読めない無粋な人〟と陰であざ笑うという、上方落語などのネタにもなっている話である。

京都人は長居しそうになった客に「ぶぶ漬けでもどうどす?」と声をかける。だが、これを真に受けてはいけない。遠回しに帰宅を促したもので、言われた客は「ほな、この辺で失礼します。えらい長居してしもて」と帰ろうとし、迎えた方は「何のおかまいもせんと・・・・・・。また、ゆっくり来とくれやす」と挨拶するのが一般的な礼儀とされる。

実際にこんなやりとりが京都であるだろうか? いわゆる都市伝説ではないか?

(次回【第七回】に続く)

鞍馬の火祭

第85回

仏教カナオレパズル

・正信偈からの出題です。
・リストの言葉を当てはめ、太枠四文字を並べ替えると答えになります。
・リストの番号と一致したマスに一文字目が入ります。
・リストの矢印は二文字目が入るマスを意味します。三文字目からは不規則です。
・マスとリストの文字は全て使いますので余りはありません。

【出題：小川信正】

1		2	3					4
		5				6		
					7		造	8
	9	10		11 大			12	
		倦	無	悲	13	14		
15			天	16			17	
18								19
明		20				21		
22	23		24					25
			以			26		

答え：

第83回・第84回の正解

第83回

唯	能	常	称		本	師	源	空	
説		覆		仏			信		応
弥		真	宗	教	証			開	信
陀		実			歓				如
	憶		大	慶	喜		寿	如	来
一	念				地			衆	
切						易	行	水	道
群		観	見	諸	仏			入	
生	死								本
	菌		開	入	本	願		誓	願

答え：弥陀仏本願念仏

第84回

五	劫		憶			来	本	誓	応	機
濁		一	念		極		願		信	
悪	衆	生			重	誓	名	声		大
時		造			悪		号			誓
	善	悪	凡	夫	人			仏	本	願
	導		聖			源	信		誓	
	独		逆	悪		空		国		天
無	明		謗		唯	明	浄	土		親
碍		蒙		道		仏		人		菩
無	称	光		難		教	証			薩
対		照		証	知			龍	樹	

答え：曇鸞大師と道綽禅師

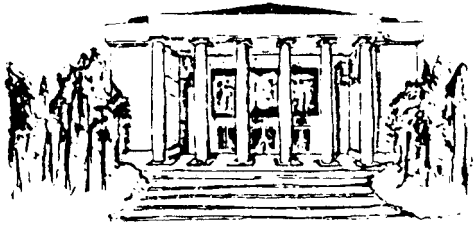
★解けた人は答えを今年度中に宗教部（顕真館北側）へお持ちください。
正解者には記念品をさしあげます。

＜リスト＞

1. 唯説弥陀 ↓
2. 能発一念 ←
3. 帰命無量 →
4. 極重悪人 ↓
5. 清浄歓喜 →
6. 一生造悪 ↓
7. 一切歓喜 ↑
8. 法蔵菩薩 ↓
9. 超日月光 ↓
10. 本願名号 →
11. 大悲無倦 ↓
12. 仏言広大 ←
13. 印度西天 ↓
14. 天親菩薩 →
15. 光闡横超 →
16. 国土人天 ↓
17. 自然即時 ↓
18. 善導独明 →
19. 本師源空 ↓
20. 唯明浄土 →
21. 開入本願 ↓
22. 顕大聖興 ↓
23. 釈迦如来 →
24. 如来所以 →
25. 源信広開 ←
26. 本師曇鸞 ←

顕真館の声

法要・行事・宗教部の取り組みの多くはＹＯＵＴＵＢＥでご覧になれます。



《二〇二一年》

七月六日　**学長法話　入澤　崇 学長**

八月二十一日　**ご生誕法要**（瀬田樹心館）

「認知科学と人工知能―科学・技術を通して人間を知る―」**小堀　聡**（先端理工学部教授）

八月二十六日公開　**公開動画**「樹心館へ行ってみよう！」

瀬田キャンパスの礼拝施設・樹心館の紹介動画

十月十一日　**伝道部法話**

「さるべき業縁のもよほさば」**藤野弘誓さん**

十月十二日　**伝道部法話**

「生きている今の為に」**清水　亮さん**

十月十三日　**伝道部法話**

「共に生きる」**玉木興慈先生**

十月十四日　**伝道部法話**

「あさはかな私」**古川晴流さん**

十月十五日　**伝道部法話**

「仏さまとともに」**宏林晃平さん**

十月十八日　**報恩講記念講演**

「親鸞聖人のみ教えをいただいてコロナの時代に心豊かに生きる」**安永雄玄**（築地本願寺宗務長）

十月二十一日　**ご生誕法要**

「仏教実践と植物素材―ミャンマーとラオスの村々にて」**落合雪野**（農学部教授）

十一月九日　**学長法話　入澤　崇 学長**

十一月十五日　**お逮夜法要**（深草顕真館）

「生活（くらし）の仏教、仏教の生活（くらし）」

三好慶祐（龍谷大学事務局長）

十一月十六日　**ご命日法要**（大宮本館）

「特別展「アジアの女神たち」を振り返る」

岩井俊平（龍谷ミュージアム准教授）

十二月一日　**龍谷大学と戦争　動画公開**

①戦時中に龍大生が作った道

②戦時中の龍谷大学（大宮キャンパス）

③なぜ深草キャンパス前の道路は「第一軍道」や「師団街道」という名前なの？

④平和の実を広島から龍谷へ、龍谷から世界へ

十二月七日　**公開講演会**

「仏教と第二次世界大戦下の日系アメリカ人収容」

ダンカン ウィリアムズ（南カリフォルニア大学教授）

十二月六日　伝道部法話

「気づかなくても、そばにいる」西居顕真さん

十二月七日　伝道部法話

「人生の課題」藤　智草さん

十二月八日　伝道部法話

「生かされている私」中川拓紀さん

十二月九日　伝道部法話

「阿弥陀様のおはたらき」七里弥名さん

十二月十日　伝道部法話

「転じて気づく」長岡智月さん

十一月十六日　ご命日法要

「限りない愚かさ」武田　晋（文学部教授）

十二月二十一日　ご生誕法要

「ベンガルの大地に生きる仏教徒たち―ムスリムとヒンドゥーのはざまで―」若原雄昭（文学部教授）

十二月二十三日　学長法話　入澤　崇 学長

《二〇二二年》

一月六日　新年法要　新年の挨拶　入澤　崇 学長

一月七日　成人のつどい

二月二十四日　水平社宣言百周年記念

「柳原銀行記念資料館に行ってみた」動画公開

四月一日　入学式　龍谷大学深草キャンパスはなまつり

四月二日　入学式　龍谷大学瀬田キャンパスはなまつり

四月十二日　顕真館の紹介動画公開
音声制作提供：おしゃかぽん

四月十六日　伝道部法話
「親の呼び声　子の返事」池田　惟さん

四月十七日　伝道部法話
「ふるさと」龍渓顕隆さん

四月十八日　伝道部法話
「行住座臥もえらばれず」玉木興慈先生

四月十九日　伝道部法話
「お慈悲の仏さま」西居顕真さん

四月二〇日　伝道部法話
「身を任せる」小泉光慧さん

五月二十一日　創立記念・親鸞聖人降誕会法要　記念講演
「これからの世界」を生きる皆さんが持続社会とダイバーシティにどう取り組むか」
ウスビ・サコ先生（京都精華大学前学長）

六月十五日　学長法話　入澤　崇 学長（深草顕真館）

六月十五日　お逮夜法要
「見えるもの・見えないもの」中野寛之（法学部教授）

六月十六日　ご命日法要
「人間は一本の管、だが苦悩する管である」
杉岡孝紀（文学部教授）

六月二十一日　ご生誕法要
「多様性と多声性：「ともに生きる」ことを考える」
山田　容（社会学部教授）

七月五日　**学長法話　入澤　崇 学長**

七月七日　**伝道部五分間法話**

「おてがみ」**長岡智月さん**

七月十四日　**伝道部五分間法話**

「阿弥陀様のおこころ」**中川拓紀さん**

七月十五日　**お逮夜法要**

「話し合いがまちを創る～月かげのいたらぬ里はなけれども……～」**只友景士**（政策学部教授）

七月十九日　**学長法話　入澤　崇 学長**

七月二十一日　**ご生誕法要**

「命をささえる食」**細見陽子先生**

（あそかビハーラ病院　管理栄養士）

【表紙写真解説】

こども米プロジェクト

野口聡子（こども教育学科教授）

短期大学部こども教育学科の学生は、保育士資格と幼稚園二種免許を取得し、保育園、こども園、幼稚園に就職していきます。そのため、二年間という限られた時間内で、様々な方面からのアプローチを必要とする「食育」の学修環境を保障しなければならない実情があります。

そこで、一年生の入学時教育（オリエンテーション）から、早速「食」に関する取り組みを実施しています。そこでは、茶道や仕出し弁当といった京の食の文化、いのち、健康や自然について考える機会を設けています。その後、「子どもの食と栄養」（担当教員：野口聡子）では「食育」として、「幼児と表現A」（担当教員：羽溪了）では「環境に基づく表現」として、食物が育つ様子を環境とし、自然が営む環境を体感することを重視した授業を展開しています。

保育園、こども園、幼稚園での「食育」は、イベントとして、あるいは行事食の一環として実施されてきました。しかし、コロナ禍で従来の通りの「食育」が実施できなくなっています。そのため、コロナ禍でも「食育」として実施できること、すべきことを考えた結果、主食である米の成長を観察することで、子ども達の成長発達に添い、さらには子育て支援、地域連携に繋がる可能性を「米を育

てる」ことでできるのではないかと考えました。それが、二〇二一年度にこども米プロジェクトを立ち上げるきっかけとなりました。まずは二年生四名、教員二名の合計六人で二十一号館の地下にプランター十鉢を置き、お米を育てました。二合のお米を収穫することができ、そのお米を使ったレシピを考案しました。参加した学生からは、次のような感想が寄せられました。

「田植えから脱穀において、現代では機械化されていることも手作業で行なったことによって、よりお米ができる過程や手間への関心が深まりました。」

「『食べ物に感謝して食べる』という言葉の重みを知れた気がします。このお米であれば、なんの付け合わせがなくとも、そのままで何杯でも食べることができると思いました。そう思うことができたのは、きっと自分たちの力でお米を育てたことによって生じた愛着や、農家の方々の大変さを身に染みて感じたからではないかと考えます。」

こどもの食育において、実践的、体験的であることの大切さを痛感しました。食育において、自分たちの手で育てるということが、どれほど子どもたちにとって良い経験になるか理解することができました。子どもたちにも苦手な食べ物があれば自身で育てる機会を与えられると良いと感じました。その他にも、保育者になる身として、どのような形で子

どもたちと共に食の成り立ちを学んでいくと良いのかを今後も考えていきたいです。また食事のメニューを考えた際には、主菜、副菜、汁物、デザート全てにお米が使われていることに面白みを感じました。お米ひとつとっても多くのメニューに活かせることが分かり、お米を使ったこともちろんですが、新たに〝お米を使った料理〟に興味を持つ良い機会になりました。

二〇二二年度は、二年生三名、一年生三名、教員二名の計八名で、こども米プロジェクトに取り組んでいます。場所を二十一号館の地下から、日当たりのよい八号館前に移し、お米の栽培をしていたところ、学生から「案山子を作りたい」との声があがりました。今は、学生製作による二体の案山子が稲の成長を見守ってくれています。八月には、案山子の温かいまなざしのもと、稲穂に白い花が咲きました。あとは秋のお米の収穫を待つばかりです。

最後に、学生による案山子の製作秘話についてご紹介したいと思います。

「お米を育てるなら案山子も」というノリで始まりました。「ちょうど女の子のウイッグがあるから」「麦藁帽子やスウェットも」と、衣装はすぐに揃いました。問題は骨組みの藁と竹を如何に運ぶか？

でした。悩んだ末、通学時の電車で運ぶことになりました。改札では駅員さんに気づかれぬように…。特急や急行ではなく、空いている各駅停車に乗って…。それでもブルーシートに包まれた大きな荷物はかなり目立ちました。

こうした地道な努力が実り、キャンパスに案山子がいるという珍しい光景が現れたのです。ひと足早く九月十日―十一日に京丹後奥大野地区で川口区長様、京丹後市農業振興課課長松下様のご協力で楽農くらがきのメンバーのご指導のもと、創設メンバーである卒業生四名と二年生二名と教員二名で稲刈り体験をしてきました。（p29左写真）

次に深草キャンパスに現れる珍しい光景は稲刈り！です。その日が待ち遠しい今日この頃です。

BOOK GUIDE

『〈叱る依存〉がとまらない』 村中直人 著

叱るのはよくないことだとわかっていながらつい叱ってしまうという悩みを持っている人が読み、「叱る依存」を克服していくための示唆に富んだ本。しかしながら、著者の目的意識は個人だけでなく社会全体が「叱る依存」に陥っている状態を何とかしようとすることにもあった。

紀伊國屋書店
'22年2月17日初　版
'22年3月18日第三刷
1600円＋税

「叱ることには効果がある」という考え方があり、日本では大いに支持されているが、その効果は予想に反しあまりに限定的であり、かつ、叱る者には叱ることへの依存性がある。それは人間の処罰感情がどうやら本来的な欲求だからである。また、叱ることと、体罰やDVの間には「低くて薄い壁」しかないこと、また昨今の犯罪に対する厳罰化の傾向や、社会的に「正しくない」と認識された人を大勢で叩く傾向、人工妊娠中絶には安全より「厳罰」であることを求める傾向など、「叱る」依存が社会全体を覆っている事実も指摘されていく。

著者は、依存症全般についての誤解をときながら当事者を支援する活動をしている松本俊彦氏から大きな影響を受け実践している。帯にコメントを寄せている松本氏も、本書を読み自分と同じような問題意識から書かれた本であることを嬉しく思ったそうである。**【石】**

『絵ものがたり 正信偈2
―インドから中国へ ひかりを伝えたお坊さま―』

浅野執持 文・**藤井智子／加藤正／麻田弘潤** 絵・**釋徹宗** 解説

法蔵館
’21年9月10日
1300円＋税

親鸞聖人が『顕浄土真実教行証文類』「行巻」末に設けた偈頌、「正信念仏偈」。その内容を丁寧に、かつ大胆に「超訳」して味わうシリーズの第二冊。著者は広島仏教学院の講師を奉職していることもあり教学的な考察は十分におこなわれている。

第一冊は前半の「依経段」だった。今回は後半「依釈段」の、「七高僧」の前半、龍樹菩薩・天親菩薩・曇鸞大師の三師について味わう。「絵ものがたり」とあるように、浄土真宗にゆかりの絵師をまずは三人、選りすぐったイラストも素晴らしい。三者三様の特徴ある絵が味わえる。

解説は釋徹宗師。おそらく本のコンセプトに賛同して引き受けてくださったのではないだろうか。浄土真宗との接点が今までまったくなかった人が何かのご縁で「ふと」この本を手に取ってしまい、戸惑いながら読んで、やっぱりわけがわからなくなって「そ、そうだ解説を読んだら何か分かるかも……?」と助けを求めた人がいたとしても、その人にも優しく、わかりやすく書いてくださっている。

七高僧の後半四師についての第三冊も企画されているのだと思える。次はどのような本になるのだろう。

【石】

『ねえ、お坊さん教えてよ どうしてお葬式をするの？／死んだらどうなるの？』

岡崎秀麿・冨島信海（浄土真宗本願寺派総合研究所）著

本願寺出版社
’21年11月15日
1600円＋税

浄土真宗の教えや僧侶と少しずつ接点を持ち、聞きたいことが出来てきた人が、仏教や浄土真宗をもっと知って深く考えていくための二冊。

タイトルからは死や葬儀についてみっちり教えてくれるように思えるが、死については実存的で哲学的な考察というより、その周囲の仏事作法の意味づけなどを浄土真宗のオーソドックスから考える。他にも、お仏壇やご法事、お墓などについて浄土真宗の模範解答のようなものが示される。

最初から「はい・いいえ」で簡単に答えるのではなく、いろいろな条件によって回答が変わることをやんわりと説明してから、ゆったり答えている。回答は浄土真宗的だが、前提の知識や思想は広く仏教全般や他の宗教、さまざまな思想を広く蓄えているので、説得力がある。また、「本書の活用法」が当時の研究所所長から提案されたり、各トピックに「一緒に考えてみましょう」という項目があったりして、本願寺派で推進しているご門徒さま向けの連続研修会「れんけん」のような本でもある。込み入った質問には「近くの人にも聞いてみて」と謙虚な姿勢も示す。（いない場合はどうしよう？）

お墓についての見解を、本願寺派の当局が緩やかに打ち出しているのが、浄土真宗の内部にいる者としては（賛否はあるだろうが）新鮮であった。

【石】

『みちしるべ 六波羅蜜シリーズ
忍 辱 真実を受け入れる』

藤田一照・阿純章・前田壽雄 著

仏教伝道協会
’22年6月15日
220円＋税

八聖道（正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）とならぶ仏教の大切な実践である六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧）の一つをとりあげ、関連したテーマでエッセイが綴られるシリーズ第三冊。今回の主題は「忍辱」・たえしのぶこと。著者は曹洞宗から藤田一照師、天台宗から阿純章師、そして浄土真宗本願寺派から前田壽雄師。前田師は本学ＯＢで、書評子【石】と大学院の同期・同ゼミである。

各エッセイのタイトルに掲げられた、仏教語やそうでない短い言葉について、三者三様に、宗派の特徴的な味わいを述べたり仏教全般に通じる内容を述べたりしながら共通テーマ「忍辱」を考え味わう。読物として楽しく読めるものもあれば、知的な教訓を得てうならされたり、大切な「お説教」をいただくように読めたりする。仏教の奥深さと射程の広さを思う。

発行の仏教伝道教会から、おそらく全国のお寺に一冊ずつ発送されていると思う。僧侶の多くにはときおり「お説教」をする役目が

ありがたくも課されることがある。そのときに大いに参考に出来る本でもある。

【石】

『人生相談を哲学する』 森岡正博 著

生きのびるブックス
’22年3月15日
1800円＋税

著者が回答者だった朝日新聞の人生相談をそのままままとめたもの、ではなく、自分が回答した人生相談をもう一度読み直し、そこからたぐいまれな哲学を開始したもの。

人生相談の回答はネットのニュースなどで拡散されることがある。質問者の人生だけではなく読者の人生の一部も解決しかねない見事な回答はもちろん、質問者が無意識のうちに持っている偏見が暴かれ、別方向に解決されていくような興味深い回答もある。

本書で紹介される人生相談はそれらとちょっと違う。紙上の人生相談の質問と回答が紹介されたあとで、著者が「もっとこんなふうに考えてこんなふうに回答すべきだったのに」と反省し、あらためて、より詳細な哲学的回答を述べる。この深く新しい回答は本当に質問者の真意を汲んだものなのか、著者が深読みしすぎているだけなのか、それはわからないが、たぶん後者であり、哲学的で唯一無二な回答の過程は著者の哲学の歩みを前進させているようだ。

真剣に考え始めると答えが容易には導き出せなくなるような物事もある。そんな中、限られた字数でそれでも回答を提示する人生相談は偉大であるし、人生相談からも哲学はこんなに可能なのである。

著者は、自身の考察が実存的に深められたことをよろこび、質問者に最大の謝辞を送る。哲学は丁寧かつ律儀な営みなのである。

【石】

『当事者は嘘をつく』 小松原織香 著

筑摩書房
’22年1月26日
1800円＋税

今回もっともおすすめの一冊。ただし冒頭部分の告白には面食らうかも知れない。

著者は『性暴力と修復的司法　対話の先にあるもの』（成文堂）で第十回西尾学術賞を受賞した若き研究者である。今作では自らが性被害（性犯罪ではない）のサバイバーであると認識している旨を述べつつ、読者に問いかけ、突きつけ、寄り添い続けながら、当事者である自分を軸に論考を進める。

筆致が柔らく、優れた小説のように読みやすい。少しずつ謎が解かれていくミステリーかロードムービーのように進む文章は、最後には自分を棚上げにしない希有な研究者の誕生を当事者の目線で追体験させてくれる。それでいてなおかつ超弩級に重量級の内容には、ただただ圧倒される。

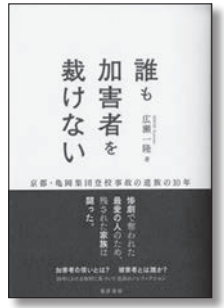
ちなみに「修復的司法」というのは、犯罪の被害者がすべてを調整した環境下で自分の意思から加害者と会話をすることを選び、それを通して何かを得ようとしていく方法のことである。（日本では定義に用いる言葉や概念に多少の「ゆらぎ」のようなものはあるようだが、「英辞郎」というサイトでは「犯罪の加害者、被害者、地域社会が話し合

うことで、関係者の肉体的・精神的・経済的な損失の修復を図る手法。」と説明されている。）

著者は研究者や第三者による当事者の類型化を嫌う。当事者は「そのこと」だけの影響を受け続ける悲しい犠牲者ではなく、至極当然なことながら、それ以外のことも味わって生きている。人にはいろいろな側面があるし、本書が示すように変化し続ける。「嘘をつく」という衝撃的な表現には、当事者の変化や多様なあり方が含まれているのかもしれない。

【石】

『誰も加害者を裁けない
京都・亀岡集団登校事故の遺族の一〇年』広瀬一隆 著



晃洋書房
’22年３月30日
1400円＋税

二〇一二年四月に京都・亀岡で起こった「無免許の少年の運転する車が集団登校中の児童らに突っ込み、三人が死亡、七人が重軽傷を負う事故」を新聞記者である著者が発生直後から取材し、被害者の家族に一〇年間、密着したリポート。

わたしたちは事故や事件の「遺族」と聞くと「悲しみにくれる存在」を思い浮かべる。しかし均質的な「遺族」が存在するわけではなく、誰かが突然に遺族になるので、当然、さまざまな遺族がいることになる。また、遺族は四六時中「遺族」だが、当然ながら遺族ではない側面をも生きている。

加害者も同様に決して均質な存在ではない。更正を助ける身近な人がいる場合もいない場合もある。そして被害者も遺族も加害者も、

一人一人変化していく。それはおそらく事件が発端となった変化である。遺された家族は遺された家族で生きていく。

遺族の一人は言う。自分は加害者を許さないが、他の加害者の更正は見守り手助けしたい。同様に加害者にも更正を見守り手助けする人がいるべきだ。だがわたしは彼を憎み続ける。加害者への罰則は不十分であると認識しているが、だからといって自分が加害者を裁いて危害を加えるのは、自分が加害者になるということで、それは亡くなった家族が最も望まないことである。

一〇年経っても、何も終わるわけではない。本を一冊読んだだけなのに、まるで一〇年苦しんでいるかのような錯覚に陥る。丁寧に寄り添って、遺族の心の内側をこんなに感じさせてくれる本はないと思う。

【石】

『日本の中絶』 塚原久美 著

ちくま新書
'22年8月10日
900円＋税

以前こちらで紹介させていただいた『中絶技術とリプロダクティヴ・ライツ：フェミニスト倫理の視点から』（勁草書房）という、少し専門的な書籍の著者による、今回は新書ということもあり、一般向けで比較的平易な内容の、日本の中絶に関する諸問題の入門書。

自身の経験などをもとに、二〇年以上にわたり中絶について研究している著者は、日本の中絶に、過度なスティグマ化（負の烙印）や、商業主義と結びついた「水子供養」など多くの問題点があると指摘する。

帯に大きく「一年に十四万件」とあるのは二〇二〇年における日本の中絶件数である（五五頁）。「一九五三～六一年までの九年間は、届け出のあったものだけで毎年一〇〇万件以上、総計一〇〇〇万件もの中絶が行われました」ともある。

このような数字も提示しつつ、著者がこの本で問題にしたいのは中絶件数の多さや中絶の「罪深さ」ではなく、むしろ逆に、日本の性教育や中絶の特殊性、とりわけ女性を幾重にも取り囲んでいる差別的な状況と、安全な中絶へのアクセスのしづらさ、諸外国の標準的な中絶に関する情報が日本国内では著しく少ないこと、などについてである。

たとえば、世界中で医師の処方が必ずしも必要ではない状態で使われている安全な経口中絶薬が、ごく最近になり、日本でも認可されつつある。しかし日本の公式なサイトには「安全ではない」という古い情報が掲載されるなどミスリードな状況が続いている。その誤情報と現在の法律にのっとって、どうやら、薬の使用には医師の処方と入院が必須条件となり、費用も保険適用外の自由診療扱いで手術と同額程度の一〇万円前後と、先進諸外国（七〇〇円程度）の百倍超になる見込みであるらしい。（本書およびＢＢＣなどの情報）

海外のやり方が必ず善であるということはないはずだが、それでも日本で行われている中絶の方法と、中絶を「厳罰」化する考え方（『〈叱る依存〉がとまらない』）、女性の身体に関する決定権の所在など、日本の現時点でのやり方は、かなりちょっとおかしい。

著者の前著や本書を読むまで知らないで過ごしていた中絶の事実があまりに多すぎる。啓蒙されるというより、今まで騙されていたのではないか？という感覚のほうが正直強い。大変な本である。少しずつでも良いから変えて行かなければならない。

【石】

編集後記

宗教部報一〇七号を手に取っていただきありがとうございます。

今年は、当冊子で長年連載している仏教パズルが新聞・雑誌に取り上げられました。今回のパズルにも是非チャレンジしてみてくださいね。

そして、裏表紙の間違い探しは「難しすぎる」という声が多かったので、少し間違いの数を減らしてみました。こちらも是非チャレンジしてみてください。

宗教部報は学生・教職員の「今」を発信する冊子です。「こんなことをしています！」「発信したい情報がある！」という方は、是非宗教部にご連絡ください。宗教部報はみんなで作り上げる冊子を目指して今後も発行していきます。

YouTube

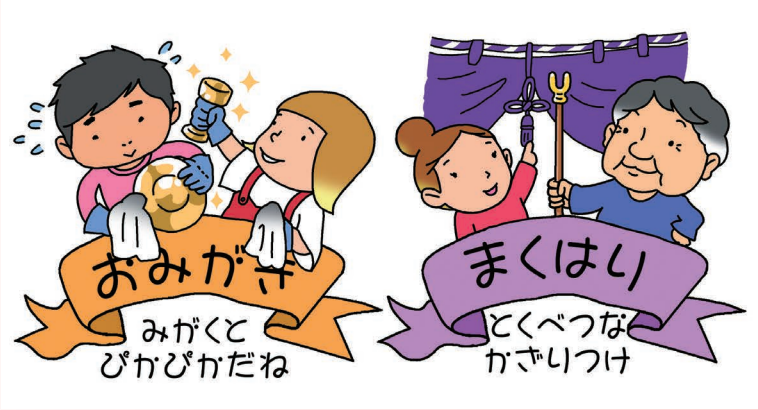
Facebook

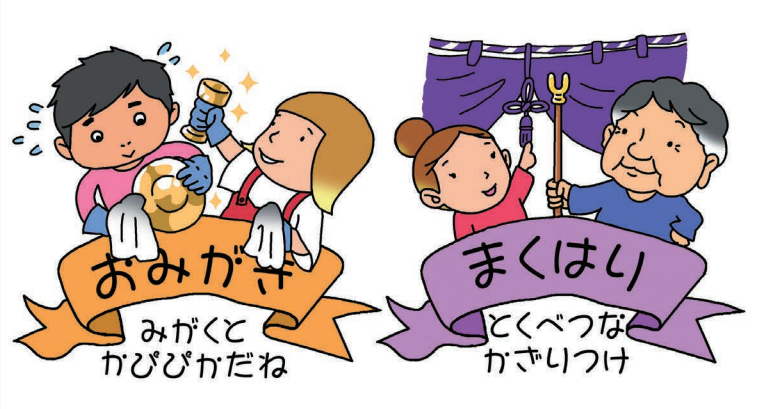
Twitter

Instagram

ちがいさがし

2枚の絵の中に、違うところが10個あるよ





【用語解説】

おみがき……仏具磨きのこと。ほこりやロウ、煤などで汚れた仏具を定期的にみがくことを「おみがき」といいます。真鍮製の仏具が見違えるように綺麗になり、気持ちもサッパリしますよ。

まくはり……法要などの特別な日に張る幕を幔幕（まんまく）といいます。

※まちがい探しの答えは載せていません。まちがいが全て見つかった人は顕真館裏の宗教部で記念品を受け取ってくださいね。

宗教部報 りゅうこく 第107号 2022年10月18日発行 龍谷大学宗教部
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67 TEL 075-645-7880